



避寒リゾート「コートダジュール」の誕生 (その3)

国際観光研究家 石井 昭夫

(前 帝京大学教授)

4) カジノとモンテカルロ

コートダジュールの発展の中で、もうひとつ採り上げなくてはならないのが、モナコ公国のモンテカルロである。モナコは、アルプスが垂直に海に落ち込む崖っぷちの国であり、国土は海岸沿いに長さ 3km、幅は広いところで 1km 強、面積はわずか 2km² ほど、資源は何もなかった。1848 年、イタリア統一を目指したサルディニア王国のヴィットリオ・エマニュエル 3 世は、当時モナコ公国の領土だったロクブリュヌとマントンを占領した。両地区を合わせると旧モナコ領の 95% に達する面積だったが、1856 年、混乱の中モナコ王位を継承したシャルル 3 世は、1861 年に両地区の支配権をナポレオン 3 世に売却するという思い切った方法によって独立を維持したのであった。わずか 2km² の独立国など時代錯誤だという国際世論を押し切ったの独立維持であったが、そのモナコをユニークな観光国家に仕立て上げた功労者がシャルル 3 世であり、その成功の秘密がカジノであった。

ヨーロッパのカジノ事情 モナコは 1854 年の時点で早くもがカジノ創設のアイデアを持っていた。資源のない小国が経済的に自立するための策と考えたからであるが、カジノは当時のヨーロッパで微妙な時期を迎えていた。金銭を賭ける賭博は、悪徳と反政府の温床になりがちで、これを認めれば収集がつかなくなることを当局は充分承知する一方で、賭博は人間の射幸心^{しやうこうしん}に強くアピールし、結果として多大の収入を生むことも証明済みであった。売春行為と同じで「全面禁止」か「規制して容認」かが問題になっていたのである。カジノの場合はさらにもう一つの可能性、すなわち、過度にならないために、当局自らがカジノの経営に係わって収入を得るという方法であった。

フランスでは制限つき容認の方針を取り、ルイ 15 世 (在位 1715~74) の時代、カジノの元になる賭博場があちこちに出来ていた。フランス革命で一時放任状態となったが、ナポレオン帝政期にカジノの規制を復活させ、場所を限定して開業を容認した。この時期に隆盛を誇ったのがパリのパレロワイヤルのカジノであった。次いで 1806 年に「温泉場で、シーズン中のみ容認」という趣旨の追加の政令が出され、地方にも広がった。これが金銭賭博と温泉滞在地との関係に公式に言及した最初の文書である。

ピューリタンの英国は、1814 年に「ゲーム法」 Gaming Act によって金銭賭博を禁止していたし、フランスも、その後七月王政が 1838 年法によって全面禁止に転じ、パレロワイヤルにあった 18 ヶ所のカジノも閉鎖された。これはライン川沿いに温泉場を有する貧しいドイツ諸侯にとってまたとない僥倖^{きやうこう}であった。折から 1840 年代にヨーロッパの貴族たちが夏を温泉場で過ごす風潮が高まっており、パレロワイヤルで賭博事業に経験を積んでい

た仕事師たちが、ドイツに出かけてカジノを開業することになったからである。例えばバーデン＝バーデンに行って成功したジャック・ベナゼ Jacques Benazet であり、ホンブルクに行ったフランソワ・ブラン Francois Blanc(1806~77)であった。

モンテカルロ誕生 シャルル 3 世は皇太子時代の 1854 年、ドイツの湯治場のカジノの実態を、信頼する弁護士エイノーに命じてひそかに調査させていた。バーデン＝バーデンでは、ルーレットは談話室に置かれ、パンフレットは《洗練された楽しみ》を謳うだけで賭け事については語らず、客も表向き賭け事はしない振りをし、カムフラージュして営業していた。これに対し、のちにモンテカルロのカジノを仕切ることになるフランソワ・ブランは、ホンブルクで大っぴらに賭博を宣伝するという正反対の行き方をしていた。

エイノーはバーデン＝バーデンをモデルとすることを皇太子に進言し、新しく作る施設にはカジノという言葉を使わず、「モナコ海水浴場」Bains de Mer とすることを提案した。1856 年王位についたシャルル 3 世はエイノーの案を採用し、フランス人実業家に委託して経営主体となる海水浴場会社 (SBM) を設立させ、1856 年 12 月 14 日、モナコの東端のスペリュグの丘 Plateau de Spelugues (穴倉の意) という名の未開発地に賭博のクラブを開設した。夏期に各地の温泉場などに案内状を送ったが、冬季シーズンになっても客は来ず、毎年赤字続きのまま 1862 年に破綻してしまった。ついにエイノーは翌 1863 年、フランソワ・ブランに建て直しを委託する。この時ブランは 57 歳、ホンブルクでの稼ぎで大富豪になっていた。ブランの計画は、シャルル 3 世とともに、この小国に超一流の《遊び場》を建設することであった。カジノの周辺に豪華なホテルやレストランをはじめ、様々な賭博客の楽しみの施設をつくり、アクセスを整備し、1865 年にはスペリュグという冴えない地名を「モンテカルロ」と改名した。モンテカルロとは「カルロの山」を意味し、カルロはフランス語ではシャルルだから、シャルル 3 世の名前にちなんで改名したのであった。ブランによる初代「カジノ・モンテカルロ」は翌 1866 年に完成した。時を合わせるように鉄道も開通し、初年度に 80 万フランの利益を上げた。2 年目にはカジノ入場者数が 345,000 人に達し、3 年目には利益が 300 万フランにもものぼった。カジノの成績があまりにも好調なので、シャルル 3 世は以後モナコ公国の諸税を全廃したのであった。

その後のモンテカルロは、ビスマルクのドイツが 1877 年にカジノを禁止したため、ヨーロッパ随一のカジノを擁する超高級リゾートとして、日の出の勢いで避寒客をひきつけていくのである。

5) マントン

5 番目の避寒リゾートはマントンであった。イタリア統一運動の中で、ロクブリュヌと共にモナコ王家の専制支配に反旗を翻したマントンは、サルディニア領内の自由市を目指したが、1861 年親仏のシャルル 3 世によってフランスへ売却され、両者ともフランスの町になった。マントンは地形的に孤立していて、行き止まりの袋小路のような位置にあり、避寒リゾートになるなど誰も考えていなかった。気候が温暖である以外に何の取り得もなく、交通は不便で高くついた。外国人を受け入れるサービスは何もなく、小さな通過旅客用のホテルが 3 軒と、1 ダースほどの賃貸用家屋があるだけだった。

ベネット医師の登場 そのマントンでも、やはり、特定の人物がリゾート誕生の歴史に係わっている。ジャック・ヘンリー・ベネットなる英国人医師が重い病気にかかり、1859/60年の冬ロンドンを発ってマントンにやってきた。当時マントンは英国では全く知られておらず、彼が何故マントンを選んだかは不明である。ここでの避寒静養で病気が治癒し、以来彼は毎冬マントンで過ごすことになる。そればかりではなく、彼はマントン滞在中医師として働き、かつ、南仏の避寒地を紹介する著作を次々と刊行した。

ベネット医師の最初の本が出るや、ただちにマントンの人気が上がって避寒客が殺到し、避寒療養地としての名声は短時日で確立した。ベネット医師が初滞在した2年後の1862/63年の冬には、早くも合計300もの家族が避寒にやってきた。1家族平均5人として、人口わずか5,000人ほどの小さな町に、いきなり外国人が1,500人もやってきて半年近く滞在するのだから、マントンの住民が驚いたのも無理はない。ちなみに、この年の避寒客の内訳は、主なところで、英国人43%、フランス人22%、ドイツ/オーストリア人13%、ロシア人9%、スイス人7%などであった。しかし、これで驚くのは早かった。1860年代中頃に鉄道が開通すると、さらに避寒客が増え、1872/73年には997家族、1910/11のシーズンには2,590家族にも増え、人気避寒リゾートになっていた。

マントンは、ベネットが「20回の冬をマントンで過ごし、毎回春には地中海のあらゆる方面を旅して回ったが、気候はマントンが最高である。私はマントン以上の避寒地を知らないか、少なくともまだ見つけていない」と絶賛する療養適地だったのである。

6) その他の避寒地：コートダジュールの誕生

鉄道の開通はどここの国でも近代観光の始まりを告げる号砲であった。と同時に、鉄道新設の当初は、地域や町によって鉄道は望まれ、反対され、あるいは容認されるなど、様々な反応に遭遇した。コートダジュールでも、観光の要素を比較的多く持っていたニース、カンヌ、モンテカルロは鉄道の開通を待ちわびたが、イエールは鉄道が離れたところを通ることを歓迎し、マントンでは「鉄道は害あって利なし」と冷淡であった。反対の理由は、鉄道は町の静寂を乱すだけでなく、機関車の噴煙で療養地の空気を汚し、さらには海岸と並行に鉄道が通れば町を2分するか、町を海から切り離すことになって、海岸線との往来が不便になるだけだと考えたからであった。

結果は、鉄道開通によってヨーロッパ各地の王族、貴族、トップクラスの実業家など富裕な階級の人々が競ってコートダジュールでの避寒に参加するようになった。先行していた5つの町は拡大発展したが、地形的に既存リゾート地の面的拡大には限界があり、年を追って全く新しいリゾートが海岸沿いや岬や後背地に誕生していく。

元々コートダジュールの町は、丘の上や入り江に築かれた古城を中心に城壁で守られた小さな町と、寂れた農漁村があるだけだった。ニースとイエールとマントンは、旧市街は狭くて避寒客を収容するスペースがなく、延長線上に郊外の畑地などが買収されて、いわば自然発生的に避寒地が造成された。他方、カンヌやモンテカルロは、何もない新天地にいきなり避寒地が建設された。鉄道開通後に新しく登場する避寒地も、概ねどちらかのケースに該当した。

新リゾートの誕生 冬季に数ヶ月も居住地を離れて避寒できるのは、王侯貴族か最上層のブルジョアであり、中産階級層に手の届く贅沢ではなかった。新しく登場する避寒者たちは、先駆者たちにもまして豊かな人たちで、既存の避寒地にこだわる気持ちはなかった。むしろ、海辺からは遠い眺めのよい高台を選び、あるいは、道路や鉄道の沿線や既存の町を避け、地元住民と接触しないで済む未開地に別荘を設けることが多かった。鉄道駅から道路からも遠い岬の突端などが好まれ、その結果、カップ・アンティーブ、カップ・フェラ、カップ・マルタンという超一流の3つの避寒地が誕生する。カップ cap とは岬ないし半島の意で、3者いずれも他者の入り込めない王侯貴族たちの特権的リゾートとなった。例えばカップ・マルタンは、フランスの南東隅のマントンからさえも孤立した交通不便な岬であるが、1890年に室数300の超高級のグランド・ホテルが建設されて以来、王侯貴族の避寒生活で賑わった。とくに当時の超セレブであった2人の皇帝妃が繰り返し滞在したことはよく知られている。ひとりはおオーストリア帝国のフランツ・ヨーゼフ皇帝妃、愛称をシシィと呼ばれたエリーザベト皇帝妃であり、もうひとりはおナポレオン3世妃ウジェニーであった。エリーザベトは1894年から、避暑滞在中のジュネーブで暗殺される1898年まで毎冬やってきたし、ウジェニー妃は、ナポレオン3世が普仏戦争で失墜した後ここに別邸を持ち、失意の前皇帝妃として過ごしたのであった。

コートダジュールの誕生 1870年には3ヶ所（イエール、ニース、カンヌ）しかなかった避寒滞在地にモンテカルロ、マントンが加わって5ヶ所になり、さらに3つの岬（アンティーブ、フェラ、マルタン）や海辺を離れた内陸の高台（ニース北方の古都シメエやグラース、サンポールなど）にまで広がった。しかし、これらはそれぞれ独自、かつ、ばらばらに存在し、共通項のない点の集まりに過ぎず、この地域の避寒滞在地を総称して呼ぶ名称の必要がなかった。

状況に変化が生じたのは、普仏戦争で敗北して愛国心が高まり、フランス領になりきっていないニースをも一体として南仏海岸を捉え直す必要が生じたことである。ニースは事実上、避寒滞在地の女王的存在であるとは認められるが、どこの女王、何の女王と言えいいのか。ミディ（南仏）では広すぎたし、リビエラではラパロまでのイタリア海岸を含んでしまう。《フランス・アルプスの首都》は早々とグルノーブルの呼名になった。王侯貴族が冬の間中滞在する特殊な空間をなんと呼べばいいのか。ガイドブックやパンフレットの表題は、ミディ、プロヴァンス、リビエラという既存の地名に「冬」の見出しをつけて具体名を列挙する以外の方法を持たなかった。例えば、「^{ミディ}南仏の避寒地;ニース、カンヌ、モンテカルロ、アンティーブ…」といった具合である。

南仏海岸の避寒地に共通するものとは何か。他と区別して簡潔に表現できる地名はないのか。そこへ登場したのが1887年に刊行されたステファン・リエジャールの「コートダジュール」である。リエジャールは、間違いなくこの地域の呼名を工夫した最初の人であった。彼は避寒生活というエリートたちの行動をイメージとして捉え、テーマとして考えたのであった。「紺碧」によって暗示されたのは《至福の時》であり、贅沢な閑暇であった。

「青」は楽園の園エデンにも繋がり、この地域の総称として使用される条件を満たしていた。しかも、後の話ではあるが、南仏の暖かい冬のイメージとして創出されたこの言葉は、

この地域が夏のリゾートに転換すると、更なる輝きを増すことになるのである。ちなみに、ボアイエは、リエジャールの故郷のワインの名産地の、固有名詞らしくないコート・ドール Côte d'Or（黄金色の川岸）という名前がヒントになったのではないかと推論している。

ステファン・リエジャール しかし、作品「コートダジュール」が刊行されたからといって、ただちに南仏海岸一帯にコートダジュールの呼名がついたわけではなかった。逆にコートダジュールが市民権を得るのはリエジャールの死後であり、彼自身、自分の作品が地名になったことを知らず、命名者として忘却の底から呼戻されることなど知る由もなかった。

ステファン・リエジャールは 1830 年ディジョンに生まれ、1925 年に 95 歳で死去している。死亡告知を見た人々が「まだ生きていたのか」と驚いたほどの長生きだった。29 歳で地元の県の副知事になったのを皮切りに政治を志し、プロヴァンス地方のカルパントラの副知事時代には小説家アルフォンス・ドーデの隣人として、ドーデの作品に登場する副知事のモデルとなったことでも知られる。ナポレオン 3 世による帝政時代の 1867 年には、モゼル県で立法議会議員に選出されたが、普仏戦争の敗北でナポレオン 3 世が失墜すると、ナポレオン党であった彼は政治から身を引いてしまう。かくて、カンヌのブローガン卿のエレオノール＝ルイズ荘の正面に自分の別荘ヴィオレット荘を建てて作家業に専念し、1878 年のブローガン卿の銅像記念碑建立に際しては賞賛の詩を作って祝っている。

「コートダジュール」がイエールからマントンまでの南仏海岸を指す言葉として使われた例は 1900 年初頭に 2、3 あるが、これらはリエジャールの名と結びついたものではなかったし、第一次世界大戦以前には、まだ地名として認知されていなかった。真に市民権を得るのは、大戦後 1928 年にニース市長となったジャン・メドサンが、ニース市の宣伝のために「コートダジュールの女王」をキャッチフレーズとして頻繁に使用することによって確立したのであった。

4. 避寒と避暑：冬はコートダジュール、夏はスイス

有閑階級の南仏海岸での避寒生活は冬のみであったから、別荘も賃貸ヴィラも、避寒客向けのデラックスホテルも、シーズンが終われば次のシーズンまでクローズするしかなかった。言い換えれば 1 年のうち半分は施設が遊んでしまう。では、ホテルのスタッフや従業員は、夏はどうしたのか。夏は多くの場合、スイスのホテルに行ったのである。観光地、とくにリゾート地にとっては、季節性が最大の問題であった。だから、送客側も受け入れ側も、いかにして通年の業務を確保するかが課題であった。

有閑階級が冬をコートダジュールで避寒し始めた時期、偶々^{たまたま}と言うべきか、歴史的な必然と言うべきか、アルプスの国スイスが自然観光地として、とくに夏の避暑地としてクローズアップされて来るのである。

1) 山岳観光地スイスの誕生

18 世紀までのキリスト教ヨーロッパでは、中国や日本で高山を霊峰と呼び、深山幽谷に美や神性を見るメンタリティはなかった。旧約聖書の『天地創造』によれば、神は人間の男女を創られたあと「生めよ、増えよ、地に満ちて地に従わせよ。海の魚、空の鳥、地の

上を這う生き物全てを支配せよ」と言われた。言い換えれば、自然は克服し支配すべき対象であって、人間の手が加わっていない野生のままの自然は神から最も遠く、美しくも神聖でもあり得ず、恐ろしい場所ではなかった。18 世紀以前の西洋絵画に自然美を描いたものは無く、観光旅行の対象は、全て人間が創造した文化的遺産に限られていた。

啓蒙の 18 世紀になると、先駆的な人たちは、キリスト教の世界観はもはや問題解決の前提となり得ないことを理解し、自然界を支配する普遍的な法則性が人間存在をも等しく規定していると考えようになった。ルソーの「自然に帰れ」という宣言は、その象徴であり、新しい視野を切り開くものであった。野生の自然そのものが好奇心の対象、観光行動の対象として捉えられたとき、身近に存在していたのはアルプスであり、山と湖の国スイスであった。スイスはヨーロッパで初めての、そしてほとんど唯一の自然美を体現する観光地となったのである。

登山の始まり スイス観光の始まりを告げたのは登山であった。恐怖の対象でさえあった満年雪を頂く高山は、用もないのに人が入り込む場所ではなかった。それが新しく生まれた自然崇拜と文学上のロマンチズムに刺激されて、人々が 4,000 メートルを越すアルプス高峰の頂上を目指すようになったのである。近代登山の開祖と言われるのが、ルソーと同郷のジュネーブの植物学者オラス・ド・ソシュール (1740～1799) である。ド・ソシュールは、ジュネーブのサレーブ山やレマン湖畔から雪を頂くモンブラン (4,810m) を見て育ち、20 歳になった年シャモニーに出かけ、ブレヴァン山 (2,525m) に登り、科学の名にかけて、自分もしくは自分の支援によって最高峰のモンブラン登頂を果たすことを誓う。自ら様々な探検や調査を試みたほか、頂上への道を発見したものに高額賞金を提示したのもその一つであった。その時から 26 年後の 1786 年、シャモニーのガブリエル・パッカー医師と案内人のジャック・バルマが登頂に成功し、翌年、ド・ソシュール自身もバルマのガイドで登頂に成功した。

ド・ソシュールによるモンブラン登頂の成功はヨーロッパ中の話題となった。この時からヨーロッパ・アルプス高峰への登頂がブームとなり、スイスの山では 1811 年にユングフラウ (4,158m) が登頂され、続いて 1812 年にモンテローザ山系のフィンシュテラルホルン (4,274m)、1813 年にブライトホルン (4,171m)、1820 年にツームシュタイン・シュピッツエ (4,573m) など、4,000 メートル級の山々が登頂されていった。

初期の登頂を記録したのは、ほとんどが地元のスイス人であり、しかも氷河や植生の調査などの目的をもった科学者たちであった。スポーツないしレジャーを目的とする登山が始まるきっかけは、高山のない英国からやってきた法律家アルフレッド・ウィルズによるヴェッターホルン (3,708m、1845 年) 登頂であったとされている。この時から 1855 年モンテローザ (4,634m)、57 年メンヒ (4,099m)、58 年アイガー (3,970m) などが登頂され、1865 年に最後の難関マッターホルン (4,478m) に英国人の画家ウィンパーが登頂に成功して、アルプス登山の黄金時代は幕を下ろす。この間登頂された 140 座に上るアルプスの高峰のうち、約半分の 70 座が英国人登山家によるものであった。

死の危険と隣り合わせのスポーツ登山はともかく、登山の報道などに刺激されて山と湖の国スイスには、19 世紀の初頭から次第に避暑客や観光客が現れるようになっていた。そ

のほとんどが英国人で、彼らはグランドツアーによってイタリアやフランスに旅行する習慣を早くから持っていたから、その延長線上に自然観光地スイスをも発見したのであった。

避暑リゾートの誕生 スイスの山岳地方は、当然ながら冬は雪に埋もれ、夏が観光シーズンである。冬の避寒地コートダジュールと違って、避暑客の滞在期間は数週間から長くて2ヶ月程度で避寒の様に長期には及ばなかった。それゆえ、コートダジュールのように自ら豪華な別荘を建てることはなく、最初からホテルを発展させることになった。

スイスの最初の夏のリゾートは、正面にユングフラウ、アイガー、メンヒなどの山々を遠望するインターラーケンであった。英国人が、人口1,000人ほどの農漁村インターラーケンにやってきて、民家をひと夏借り上げて滞在を始めた。療養者ではなく健康者であったから、彼らはグリンデルワルトへ上がり、氷河をも探索した。やがてヨハンネス・ザイラーが初の旅客専用のペンションを建て（1806年）たのが始まりで、1859年には大型ホテルのシュバイツァー・ホフ、1865年には豪華なホテル・ヴィクトリアが建てられ、スイス山岳リゾートの先鞭をつけた。

ヴァリス州ニコライタール谷の最奥部、マッターホルン山麓のツエルマットにも登山客がやってきた。村のラウバー医師が片手間に夏の間6室のホテル・セルバンを経営していたが、それでは応じきれなくなり、1852年、アレクザンダー・ザイラー（1819～91）がこれを借り上げてホテル・モンテローザとして開業した。1865年にウィンパーがマッターホルン初登頂に成功し、その際7人の登頂者のうち4人が墜落死したこともあって大きな話題になり、奥の深いツエルマットはスイスきっての人気リゾートになっていく。アレクザンダー・ザイラーは、リッフェルアルプをはじめ、ツエルマット地区に幾つものホテルを経営したのみならず、広くこの地域の観光事業を手がけ、死後もザイラー一族がこの寒村を世界の名だたるリゾートへと育て上げていく。

第3の山岳リゾートは、サンモリッツであった。サンモリッツは、スイスの中でも未開地とされるグラウビュンデン州の寒村であったが、イタリアからドイツへ抜ける山中の交易路上にあったことから、1855年ヨハネス・パドルットが、商人相手にペンションの経営を始めた。これが後のエンガディン・クルム・ホテルの出発である。幸い病気治療に有効な温泉があったため、英国人の間で評判になり、こんな山中にまで彼らがやってくるようになった。そして、後述するように、息子のヨハネス・パドルット2世（1819～89）の才覚によってサンモリッツは、夏の避暑地としてのみならず、他に先駆けてウインタースポーツの中心地になっていくのである。

もうひとつ忘れてならないのが、スイス発祥の地でもあるカトル・カントン（四つの州の意味）湖周辺の山頂ホテルと、それらの基点に位置するルツェルンの発展である。リギ山、ピラトゥス山、ビュルゲンストック山など周辺の山頂に登山鉄道が通じ、それぞれの山頂にホテルが建てられて、アルプスの絶景を眺めることができた。鈴木光子著「スイス」によれば、1870年から40年の間に、スイスの山々におよそ60の登山鉄道が開通し、20世紀の初めには年間延べ600万人の客を運んでいたという。登山鉄道のブームに火をつけたのが1871年に開通したヨーロッパ初のリギ山登山鉄道で、1816年から頂上にあったゲストハウスが1875年に建替えられて、宮殿のようなリギ・クルム・ホテルに変身していた。

頂上で見る日の出は圧巻で、ここの客には英ヴィクトリア女王はじめ、バイエルンのルードウィヒ 2 世、ヴィクトル・ユゴー、マーク・トウェイン等々の著名人が名を連ねている。

スイスは王侯貴族の避暑地として人気があっただけでなく、英国人が他国に先駆けて産業革命を達成し、中産階級も国際観光に出かけるようになった時、自然美と山岳美を象徴するスイスは、英国人の憧れの観光地になった。ちなみに、トマス・クック社がスイスに初めてパッケージツアー客を送ったのは 1863 年であり、以来毎年多くのツアー客を送り続けることになるが、それはまた別の物語になる。

スイスは鉄道の敷設が遅く、フランスが 1850 年に早くも 10,000km を超す鉄道ネットワークを持っていたのに対し、スイスには、チューリヒからバーデンまでのわずか 25km しかなかった。1850 年代から 60 年代にかけて、民間会社が競って鉄道を敷設し、加えて 70 年代からスイス独特の登山鉄道が次々に登場する。当然ながら、鉄道のネットワークの広がりとともにスイス観光は大きく発展していくのであった。

セザール・リッツの登場 かくて 19 世紀後半からスイス各地にデラックスなリゾート・ホテルが次々に建てられ、伝統的な家柄貴族も、政治・経済の分野で成功した富豪や新貴族、あるいは文学・演劇・音楽その他で人気を誇る成功者たちで構成される上流階級は、続々とスイスを訪れた。これによって、冬場コートダジュールのホテルで働いていたスタッフたちは、夏場にスイスのホテルで働くことが出来たし、逆に、夏期しか需要がないスイスのホテルはシーズンが終われば閉じられるので、冬場にコートダジュールで働くというローテーションが可能になった。その実情を垣間見るために、王侯貴族相手のサービスで盛名を馳せたホテル王セザール・リッツ（1850～1918）の軌跡を見てみよう。

リッツはツエルマットに近いニーダーワルトの寒村の羊飼いの子供として生まれた。3 年ほどブリーグの小旅館などで働いた後、1867 年 17 歳の時、万国博で賑わうパリに職を求めて出て行く。最初ホテル・ド・ラ・フィデリテという三流ホテルで靴磨き、床そうじ、ポーターなどの雑用係りとして働き、昇格して正式のボーイとなった。その後一流ホテルのル・スプランディードで修業し、一流レストラン「シェ・ヴォアザン」の給仕長（メートル・ドテル）となり、花の都パリで貴賓客相手の接客に通じていった。1873 年、23 歳の時にパリを離れ、万国博覧会が開かれるウィーンに行き、超一流レストラン「トロアフレール・プロヴァンソー」（プロヴァンスの 3 兄弟）のウェーターとして働く。ここで英皇太子（後のエドワード 7 世）、ドイツ皇帝ウィルヘルム 1 世、ドイツ宰相ビスマルク、ロシア皇帝アレクサンドル 2 世といった王侯貴族の面識を得る。この時、英皇太子がリッツに「君は私自身より私の欲しいものを心得ている、私の好みに合うものを選んでくれ給え」と言って、リッツの優れたサービスを称えたという話は有名である。

2) セザール・リッツの夏と冬

ここで注目すべきは、このあとの冬、リッツはパリへは戻らずにニースへ行き、グランドホテルのボーイ長に就任し、以来コートダジュールとスイスのホテルで、夏冬交互に働くようになったことである。そのあたりをロレンツォ・ストウツキ著「スイスの知恵」（第 2 部第 6 章『観光立国のホテル産業』）の記述を中心に紹介すると次のようになる。

冬場、ニースのグランドホテルで働いていたリギ・クルム・ホテルの支配人が、青年ボーイ長リッツの才能に惚れ込んで、夏の間リギ・クルムのボーイ長に迎える。夏場にスイスへ行くのはリッツにとっても好都合であり、ここから彼の運が開けてくる。リギ・クルムにいた時期の、シーズンも終わりに近い9月のある日、昼食を始めようとした矢先に、自慢のセントラルヒーティングが突然故障した。山頂なので外気は零下数度に下がっており、滞在中の40人のアメリカ人はみな震え出した。この時リッツは少しもあわてず、まず40人を大食堂でなく小さなテーブルを並べた小部屋に案内する。食事には冷たいオードブルの代りに熱いスープを出し、キッチンストーブで40個のレンガを暖めて一人ひとりの足元において暖を取らしめた。デザートもアイスクリームに換え、アルコール・コンロで暖めて強い香をつけたクレープを供したという。この話を聞いて、リッツの臨機応変の才能に目をつけたのが、当時スイス最大かつ最も豪華なホテルであったルツェルンのホテル・グランド・ナショナルのオーナー（男爵フィッファール大佐）であった。彼はただちにリッツを支配人として迎え入れるべく招請する。1878年、リッツ28歳の時であった。フィッファール大佐はルツェルンの名家の出身で、1872年にこのホテルを建てたが、本人自身はホテルの経営に関心が薄く、経営はうまく行っていなかった。グランド・ナショナルは、リッツを迎えたことによって名声を勝ち得、その後の11年間、ヨーロッパ上流社会の夏の社交場として賑わったのであった。

リッツは、夏場をリギ・クルムで働いていた時期、冬はニースやマントンのホテルの支配人として過ごしていたが、ルツェルンのグランド・ナショナルに移ってからは、夏はモンテカルロのグランドホテルの支配人として腰を据え、1888年までコートダジュールとルツェルンを往来している。この時期に、モンテカルロのグランドホテルで料理長を新たに探す必要が生じたことがあって、オーギュスト・エスコフィエ（1846～1935）を招請し、以後2人がコンビを組んで仕事をするようになったことはよく知られている。エスコフィエはニース近辺の出身で、ニースの避寒客相手のレストランで料理人としてのキャリアを始めたことは既述のとおりである。ちなみに、ホテルだけではなく、避寒客、避暑客相手の一流レストランもシーズン外には閉めてしまうので、それまでエスコフィエ自身も夏と冬で働き場所を変え、あちこちのホテルやレストランで働いた経緯は、「自伝」や辻静雄著「エスコフィエ」などに詳細に描かれている。

1888年、ヨーロッパに大地震が起こり、モンテカルロのグランドホテルも倒壊した。リッツはこれを機に独立を図り、冬のためにはカンヌの、夏のためにはドイツのバーデン＝バーデンのホテルやレストランを買収してオーナーとなる。その後ロンドンのサヴォイホテルの経営、パリのホテル・リッツの建設など、ホテル王としての道を歩むのだが、それは本稿の主題ではないので省略する。

5. 避寒地の終焉

北ヨーロッパの王侯貴族を中心とする有閑階級の避寒という現象は、18世紀の最後の4半世紀に始まり、鉄道ネットワークの拡大とともに第一次世界大戦前まで拡大を続けた。19世紀の最後の4半世紀には、鉄鋼、石油、鉄道、その他の近代産業の発展で百万長者になった新大陸アメリカの富豪有閑階級が加わる。ソースティン・ヴェブレンの「有閑階級

の理論」が批判的に描いたように、富豪になるだけでは意味がなく、それを顕示する必要があったからなのか、彼らは大西洋を船で渡ってヨーロッパの有閑階級に仲間入りし、盛期にはコートダジュールの避寒客の 20% を占めるほどになっていたという。

また、避寒対象地も、コートダジュールほど 1 地区に集中したわけではないが、南部イタリア、地中海の島、アフリカ大陸の北岸から、クリミア半島、さらにはフロリダ半島にまで行き先は広がって行った。それが、サラエボでのオーストリア皇太子夫妻暗殺が引き金になって勃発した第一次世界大戦によって、ヨーロッパの避寒現象は突然終わってしまうのである。

1) 第一次世界大戦後と大恐慌

戦争が終わってみると、避寒生活の主要客でもあったドイツ、ロシア、オーストリア／ハンガリーという有力な 3 帝国がすべて崩壊し、王家のみならず周囲の貴族階級も消えてしまった。残るヨーロッパの有閑階級も、1929 年の大恐慌の影響で土地を基本とする年金生活が崩壊し、一時期を風靡した避寒・療養のための長期滞在という現象は 1930 年代に終わりを告げたのであった。しかし、時を同じくして全く新しいコートダジュールが誕生する。突然のように、夏の太陽を求める海水浴客が登場し、コートダジュールを夏のリゾートに変貌させていく。

冬から夏へ：ジュアン・レ・パンのアメリカ人 コートダジュールは、本来夏リゾートの適性も持っていた。過去においても、様々な機会に夏の海水浴対応の施設も提案はされたし、事実つくられたところもあった。しかし、伝統思考は、コートダジュールの夏は暑過ぎるという先入観を捨てることが出来なかった。

そういう先入観など無視してコートダジュールを変えたのはアメリカ人であった。高級保養地アンティープ岬の西の付け根に当たるジュアン・レ・パンが、アメリカ人と共に夏のリゾートとして華々しく登場する。ドス・パソス、ヘンミングウェイ、フィッツジェラルド等、のちに失われた世代 *lost generation* と呼ばれるようになる若き文人たちに見出され、それまで何もなかった海浜ジュアン・レ・パンが、アメリカの百万長者フランク・ジェイ・ゴウルド Frank Jay Gould (1877~1956) の投資によって、1925~27 年のわずか 3 年間に華麗なビーチリゾートに変身する。ジュアン・レ・パンは、それ以前のどのリゾートにも似ていなかった。あらゆる娯楽が持ち込まれ、国際的アーティストたちが競って出演して夜通し賑わい、ショーガールが目をもくような衣装で登場した。かくて夏の夜の客には王子あり、有名作家あり、そしてハリウッドのスターたちが居並んだ。まるで時差のあるアメリカン・タイムで事が進行しているように、昼間は海岸で日焼けし、夜は夜通しスターたちと賑やかな遊びを楽しんだのであった。

なぜアメリカ人は夏のお祭り騒ぎに地中海を選んだのか、その理由は彼らの小説が語っているように思われる。彼らはコートダジュールの華美を好んだのである。全てが豊かであるが空虚であり、気候は彼らに向いていた。フィッツジェラルドによれば、「夏のドービル（北フランスのノルマンディーのビーチ）は、ロシア人やイギリス人など寒さに強い人種にはよいだろうが、アメリカ人の半分は熱帯的気候の地方から来ているのだから寒い

だ」というわけである。

冬から夏への変化は、避寒地側がその動きを認識する間もないほど急激だった。例年通り冬のシーズンが終わって休業期に入ったホテルは、夏になってから客がやってきて吃驚仰天した。1934年の『フランスの真珠：マントン』なるパンフレットには次のような下りがある。「コートダジュールは、慣例どおり5月末で休業期に入り弛緩していた。なのに、この年は7月14日の革命記念日（日本ではパリ祭と呼ぶ）の頃には、早すぎる《復活》をしてしまった。かくて、夏のシーズンが誕生したのだが、この時まで、コートダジュールは炎暑の季節には人々を引き寄せる力を失うものだと、間違っ**て**信じてきたのだった…」。

冬もアルプスへ：サンモリッツの太陽 「冬は暖かいコートダジュールへ、夏は涼しいスイスへ」という常識を覆して「夏もコートダジュールへ」を**実践**したのは、兩次世界大戦間にやってきたアメリカ人であった。しかし、「冬もアルプスへ」という《非常識》を常識に変えたのは、これよりはるかに以前のことで、サンモリッツのエンガディン・クルム・ホテルのヨハネス・バドルツ2世の才覚によるものとされている。その変化は「サンモリッツの太陽」という逸話によって語り継がれ、観光マーケティングの成功例としても話題を提供している。冬のアルプスが流行に至る逸話は、「スイスの知恵」によると、次のように始まっている。

1864年9月も終わろうとしていたある晩、英国人客の最後の4人がエンガディン・クルム・ホテルの暖炉を囲んで歓談していた。彼らも明日は帰途につくというこの日、主人のヨハネス・バドルツがこう言った。「皆さん、ロンドンで寒い冬を過ごすのはさぞ憂鬱でしょう。この山頂では真冬でも太陽が照り輝き、上着もコートも着ずに日光浴ができるのです」。信用しない英国人たちに向かって彼は続けた。「ともかくクリスマスの前にまたいらっしゃい。そして、もし私の言ったことが本当だったら、あなた方を一冬中無料で招待します。もし間違っていたら、ロンドン往復の旅費をお返しします」。半信半疑ながら、馬ぞりに乗って雪に覆われた峠を越えてきた彼らは汗びっしょりで、出迎えた主人はシャツ1枚の軽装だった。

《陽光溢れるサンモリッツの冬》は、たちまちロンドンの上流社会の話題となり、コートダジュールやエジプトと並んで、サンモリッツの冬が大流行したのであった。サンモリッツのホテル業者たちは、客たちの冬の**無聊**を慰めるために、当時スコットランドやカナダで流行していたカーリングをはじめ、フィギュアスケート、雪ぞり、アイスホッケー、ボブスレーなど、各種のウインタースポーツを次々に取り入れて、遠来の客を満足させた。

20世紀に入ると、クロスカントリー・スキーだけでなく、斜面の滑降も試みられ、この地方にも登山鉄道ができたことによって益々賑わうことになる。バドルツ家3代目のカスパールは、1896年に宮殿の如きパレス・ホテルを建設し、ここには国王や王族、貴族、石油成金、ダイヤモンド成金、さらには政財界の指導者から、オペラ歌手、文学者に至るセレブたちが押し寄せてブームとなった。ちなみに、1924年の第1回冬季オリンピック大会開催地はフランスのシャモニーに譲ったが、第2回はサンモリッツで開催された。

両大戦間のコートダジュール コートダジュールの中で、カンヌは他に比較してダメージが少なかった。両大戦間のカンヌを代表するホテルは、1910 年開業のカールトン・ホテルである。このホテルは今も存在し、フランスの歴史的建造物に指定されている華麗な建造物である。このカールトン・ホテルの、両大戦間の利用客数の推移が夏冬のシーズンの移り変わりを数字で示していて興味深いので、「コートダジュールの創造」から下記に再掲させて頂こう。客数は記録された家族数をベースに、1 家族当たり平均子供 2 人、使用人 3 人の割合で算出した総人数である。大恐慌の始まった 1929 年の冬から激減し、その後再び避寒滞在客が元に戻ることはなかった。

1921～1939 年のカンヌ・カールトンホテル利用客数

年	避寒者数 (人)	夏期の客数 (人)	冬期営業日	夏期営業日
1921/22	27,203		11 月 21 日～4 月 30 日	
1922/23	32,993		11 月 25 日～4 月 30 日	
1923/24	36,320		11 月 13 日～4 月 30 日	
1924/25	38,324		11 月 8 日 ～4 月 30 日	
1925/26	44,194		11 月 8 日 ～4 月 27 日	
1926/27	40,194		11 月 8 日 ～4 月 28 日	
1927/28	41,482		11 月 16 日～4 月 28 日	
1928/29	40,353	539	11 月 15 日～5 月 7 日	8 月 25 日～
1929/30	28,492	1,466	11 月 1 日 ～5 月 6 日	8 月 26 日～
1930/31	26,603	11,283	11 月 1 日 ～4 月 30 日	7 月 1 日～
1931/32	29,204	14,432	11 月 1 日 ～4 月 30 日	夏期もオープン
1932/33	25,016	15,551	11 月 1 日 ～4 月 30 日	〃
1933/34	23,926	13,517	11 月 1 日 ～4 月 30 日	〃
1934/35	22,683	12,859	11 月 1 日 ～10 月 19 日	〃
1935/36	23,838	29,563	11 月 1 日 ～4 月 30 日	〃
1937/38		27,079	11 月 1 日 ～4 月 30 日	〃
1938/39		15,543	11 月 1 日 ～4 月 30 日	〃

避寒現象の終焉は急速であったが、夏の滞在客の増加はゆっくりしたペースであった。表で見るとおり、カールトンが夏期にも開業したのは 1929 年からである。最初は盛夏を避けて営業を始めているが、客数は微々たるものであった。1931 年の夏に 7 月 1 日から営業し、それ以降は冬のシーズンが終わったあと 1 ヶ月程度の休業期間をおいて、夏の海水浴シーズンに再開するという行きかたをとったのであろう。1935 年の夏だけ通年オープンを試みたらしいが、翌年から元に戻している。やはりリゾート地としては、両シーズンの間（春と秋）は、オフシーズンで客がなかったからであろう。

客数の夏冬逆転は 1936 年に起こり、そのあと、冬の長期滞在の避寒客はおそらく数字にならぬほどに減少し、そのまま第二次世界大戦を迎えたのであった。

2) 有給休暇法の成立：マスツーリズムの時代へ

1936年5月、フランスの人民戦線内閣が有給休暇法を成立させ、すべての労働者に連続2週間の有給休暇を義務づけた。観光界にとって記念すべき年であり、この年早くも、お金はないが休暇はある労働者階級が、自転車にテントを積んで、それまで庶民には無縁だったエリートたちだけのリゾート地にも出かけていく。ニースのプロムナード・デザングレにも、「弁当持参で労働者がなだれ込んでくる」と地元の保守系新聞を嘆かせている。1922年にはビタミンDが発見され、北国の人々は、夏の間に太陽を充分浴びておかねばとくる病になる危険性を知らされて、太陽信仰が一段と進んでいたものであった。

有給休暇法は労働者の観光への参加を保証し、観光需要が激増すると予想されたが、1939年にヒトラーがポーランドに攻め込んで第二次世界大戦が始まってしまう。その後6年に及ぶ長い歳月、世界は観光どころではなかった。戦争が終わり、長い窮乏生活に耐えてきた人々は、平和な生活を取り戻すと、海に山に飛び出していった。マスツーリズムが到来し、コートダジュールも、観光産業界も様変わりしていくのである。

(完)

主要参考文献

1. 「旅するイギリス小説」 久守和子他編、ミネルヴァ書房、2000
2. 「フランス史」 井上幸治編、山川出版社、1968
3. 「南欧史」 井上幸治編、山川出版社、1951
4. 「グランド・ツアー」 本城靖久、中公文庫、1994
5. 「Côte d'Azur」 ミシュラン・ガイドブック・シリーズ仏語版
6. 「L'Invention de la Côte d'Azur: L'Hiver dans le Midi」 Marc Boyer, Editions de l'Aube, 2002
7. 「モナコ公国の観光地形成史」 臺純子、立教大学観光研究学科修士論文、2002
8. 「エスコフィエ自伝」 エスコフィエ (大木吉甫訳)、中公文庫、2005
9. 「エスコフィエ」 (辻静雄コレクション第2巻) 辻静雄、ちくま文庫、2004
10. 「スイスの知恵」 ロレツォ・ストウッキ (吉田康彦訳)、サイマル出版会、1968
11. 「世界歴史紀行：スイス」 鈴木光子、読売新聞社、1987
12. 「有閑階級の理論」 ソースティン・ヴェブレン (高哲男訳)、ちくま学芸文庫、1998
13. 「現代ホテル経営の基礎理論」 岡本伸之、柴田書店、1979?
14. 「トマス・クック物語」 ピアーズ・ブレンドン (石井昭夫訳)、中央公論社、1995